《ガヤガヤガヤ》
（雑踏の音）

ノラ
「ほらおっさん、そっちの荷物持ってくれよ！
オレ一人じゃ持ちきれないんだからさ！
安売りしてる時に買い溜めしとく方がお得なんだから、協力してくれよお！
あっ、そこの魚の塩漬け出来が良さそうだな……ちょっとオレ見てくる！」

《タッタッタ……》
（走り去る音）

ノラと暮らし始めて数日が過ぎた。
彼女は宣言した通りに貴方の家の家事全般をきっちりとこなし、貴方の冒険に行く際の食事として簡単な弁当まで用意してくれるようになっていた。
いつもならばお決まりの保存食を持ってくるだけだった貴方が、突然弁当などを持ち始めたものだから、周囲からは随分と冷やかされ、むずがゆい思いをさせらたものである。

ノラ
「お……やっぱりだ！

ほらおっさん、見てみろよ！
これ、肉厚だし塩漬けの具合もいい感じだ。
こいつならおっさんが遠出する時にも使えるし、スープなんかに入れても美味いと思うぜ！」

貴方の家にいられると分かった安心感からか、ノラは最初に比べて随分明るく、元気になったように思える。
彼女の行動力の高さを考えれば、元々こういう性格であったのかもしれない。
今では泊めてやっている家主であるはずの貴方の方が、その元気さに振り回されこうして買い物などにも付き合わされる始末である。

ノラ
「へへ、なぁ店主さんよ！
どうだい、このおっさん冒険者だからよ、保存食とか定期的に買うぜぇ？
今日もちょっと多めに買っていってもいいと思ってるしさ、数を買うのと今後の付き合いって事で、ちぃとばっかり手心を加えてくれるとか、そういうのないかなぁ？」

だが、こうして貴方のためにと色々手を尽くす姿を見ていてしまうと、それらの冷やかしやからかいの声も……悪くないもののように思えてくるのだから不思議なものである。
何より、冒険から戻ればそこに待っていてくれる相手がいて、暖かい食

事が待っているというのは、貴方にとっても初めての経験であり、それが妙にこそばゆくも心地よいものであった。
尤も、そのせいで馴染みの娼婦の所に顔を出す機会が減り、少々恨み事を言われてしまう問題もあったりするのだが……。

ノラ
「よっしゃ！　へへ、店長話が分かるねぇ！
じゃあ、これと、これと、これと、これ……うん、全部で１０匹ぐらい包んでくれよ！
あ、おっさーん！　まだ荷物増えるけど大丈夫だよなー？」

貴方の承諾を得る前に話を纏めてしまったノラが、振り返り気味にそう聞いてくる。
買う前に話を通せ、という思いが沸いて来なくもないが……明るく楽しそうな彼女の顔を見ていると、まぁそれくらいならばいいかと、つい甘やかしてしまう自分に気付きながらも、苦笑しながら頷き返す、貴方。
少女はそれを見て、更にパっと顔を輝かせる。

ノラ
「へへっ♪　ありがとよ、おっさん！
んじゃ、今日はこの魚を使ってスープはこの間作ったし、何か炒め物で……も。
……え？」

突如、今まで明るかったノラの顔が固まった。
あまりの唐突さに何かあったのかと彼女の視線の先を追う、貴方。
見れば遠くの人だかりの中、昼間から酒に酔っているのか着崩れたみすぼらしい姿の壮年の男が、ふらふらとした千鳥足で路地へと消えていく所であった。

ノラ
「あ……」

ノラは男が消えた後も、顔色を悪くし、そのままじっと路地を見つめ続けていた。
あまりの変化に不安になった貴方は彼女へ近付くと、その肩に手を置き、
【大丈夫か？】
と、軽く揺すりながら声をかけた。

ノラ
「えっ！？　あ……うん、す、すまねぇ……大丈夫だよ！
ちょ、ちょっと……急にクラって来て、目が回っちまったみたいで……
はは、ハハハハ……。
さ、さぁ……良い魚も買えたし今日はもう帰らねぇか！
なんだか色々買って、おっさんにも持たせすぎちまってるしよ！　へ、へへへ……。
帰ったら、美味いもの作ってやるから、楽しみにしてろよぉ！」

そう言って、ノラは代金を支払うと、そそくさと荷物をまとめて、貴方を急かすように家に帰らせようとする。
どう見ても普段どおりといった様子ではない事に違和感を覚え、問い詰めようとするが……彼女は答えない。

ノラ
「何でもない、何でもないって！
こんなの帰って少し休めば平気だから、おっさんにも荷物持たせちまってるんだし！
ほら、家まで帰ったらおっさんは後はゆっくりしててくれていいんだしさ！」

ただ、何でもないと繰り返すばかりでノラそれ以上は何を聞いても答えてはくれなかった。
冒険者としての勘か、それとも数日とは彼女と生活を共にしている者としての勘なのか。
貴方は釈然としない嫌な予感を覚えながらも、今はただ……彼女に促され帰るしかなかったのであった。

《カツンカツンカツン……》
（歩いて去る音）